

科研費・基盤研究A

「天文学との連携にもとづく考古学・考古史学研究法の構築」(19H00544)

「積丹半島の和名調査(証言記録)」

「アイヌ・ローソクもらい等北海道全般テーマの初期調査」の研究成果報告書

古屋 昌美

はじめに：積丹半島で確認された「日本固有の星名(和名)」に関する追調査と 北海道独自の天文民俗について

日本では古来より、天体に関する認識により形成された星名(和名)が各地域で語り伝えられてきた。江戸期までの北海道は、道南を中心に松前藩の管轄であったものの、そのほとんどは先住民であるアイヌ民族が暮らす手つかずの自然が広がる土地であった。幕末～明治期以降、各地方からの入植者が入ることによって出身地域の伝承や和名などが入植地に伝えられることとなり、以降に残された事例や天体の認知としては本州とは違う形成をなすものがある。

北海道の漁業は時代とともに推移したものの主にニシンやイカなどを中心に、沿岸～沖合で発展してきた。今回調査をおこなった積丹半島も明治から昭和初期はニシンからイカへと漁業の中心が移った時期にあたりイカ漁の収穫期を見るうえで、星を見ながら収穫のタイミングを確認することが行われてきた。今回は北尾浩一氏が2014年、2022年におこなった調査の追確認として、6月21日に積丹半島の美国漁港、幌武意漁港等を回った際の調査記録と、2021年の松前町・函館市を中心とした七夕ろうそくもらいの伝承についての調査を中心に記述し考察につなげたい。

1・北海道 和名調査(積丹半島を中心に)

2022年6月21日、北尾浩一氏(星の伝承研究室)、福澄孝博氏(元札幌市青少年科学館)と共に、積丹半島を車でまわり各漁港を訪ねた。早朝の漁の時間を過ぎていたこともあり10の漁港をまわったうち、詳しい話を聞いたのは美国漁港と幌武意漁港の2か所、うち和名の確認ができたのは幌武意漁港だった。(写真：美国漁港の様子)



「ウジラボシ」の追確認 美国漁港～幌武意漁港

美国港(北海道積丹郡積丹町美国町船潤 1546-1)の漁協組合美国支所にて周辺に年配の漁師さんがおられるか確認。明治生まれと一緒に漁に出た最後の世代ともいわれる昭和10年代生まれの方が、2.3年前にはいらしたが亡くなられたとのことだった。以前はイカ漁が

盛んだったが現在は磯周りでのウニ漁がメインであり、最年長も 60 代とのこと。北尾氏が 2014 年の調査時にすばるの和名「うじらぼし」を採した話者をご存命であり、体調を崩されてはいるが漁を続けられているとの話を聞き、伺うことにする。ご自宅を訪問すると幌武意漁港（北海道積丹郡積丹町幌武意町 14）の番屋にて作業中とのこと番屋を訪問、話者からの聞き取りをおこなった。

（約 40 分の音声記録から抜粋 写真：幌武意漁港）

北尾（以降K）：イカつきのとき、トンボやハネゴをつかった？



話者（以降A）：トンボやハネゴつかって…星上がれば今何時だとか。昔はおやじから聞いて…今のような漁船でなく、櫂でこいでいった。沖へ出る漁もあったけど、家の前でもみんな釣ったりしたエンジンが付いてる船じゃなかった。櫂でこいでいった。ずいぶん（イカを）つけたものだった。今はイカもつれなくなった

K：夜が多かった？

A：そう、夜やる。

K：何月くらいから？

A：昔なら 10 月頃、ここの港から 30 分も漕いで行って。

K：年寄りのひとは星が出たら？（釣れるのを見ていた？）

A：東のほうにあがってくる。うじらぼしとか。9 時頃。海からあがってくる。

時計なんて持ってなかったから。（星を見て）

K：ウジラボシってどんなほし？

A：6 つくらいね、固まってでるの。東はそっち（海の方を指さしながら）

K：ウズラ？

A：ウジラ。ウジラボシ。

K：ウジラってどんな意味がある？

A：わからないけど、かたまて 6 つくらいで出てくる。ウジラボシがあがったら、イカついてくる。そういうものを見て丹念して。月の出も見る。

K：月の出も釣れる？

A：満月には釣れない。明るいから。

K：ウジラボシが出たら釣れる？

A：千匹くらい釣れる。（海の）水がはいってくるよりイカがはいってくる。学校終わって漁師やって…昭和 9 年（うまれ）。87 歳。幌向の港でずっと（漁をしてきた）。

K：このあたりは越前から来た人が多い？

A：いない。ここは青森とかが多い。苗字もカトウさんとかナリタさんとかカサイさん。

K：ウジラボシと呼んだ以外、ほかの星はなんと呼んだ？

A：おもにウジラボシ。イカ付けやって。

K：三つ並んだ星は？

A：聞いたことがない。月の出はあった。

K：50年ほど前に美国で「サンコウ（三光）さん」という星の名前を聞いたが…

A：ここではいわない。（K：アカボシ・アオボシもない？） ない。

1979年、1999年の北尾氏の積丹半島調査時には、上記のウジラボシ以外にサンコウ（オリオン座三ツ星）やアカボシ（おうし座 α 星アルデバラン）、アオボシ（おおいぬ座 α 星シリウス）など採集できたが今回の追調査では確認できなかった。漁自体も現在のメインはイカ漁からウニ漁へとシフトしており、高齢者が引退し一番若い世代でも60代となっているとのこと。今後の調査も非常に難しいものと思われる。

積丹半島の十五夜と七夕

K：十五夜はやった？

A：やった。9月に。今はやらないけど、山に行ってススキ取ってきてあげて。

月に供えものをした。とうきびとかそのままそなえて（K：お団子は？）

団子もつくった。中にあんこが入ってるの。食べるものがないから楽しみで。家で（団子を）つくって食べる。10個くらいは供えたかな、団子と「とうきび」と枝豆と山ぶどう。うちの婆が…もう亡くなったけど、年寄りがやってあげたもんだ。

K：団子はそのあと食べた？

A：供えたものはみんな食べる。食べるものが少なかったから…学校から帰ってきて、遊びといえば海へもぐって貝とかウニとかを食べる。十五夜は今もやる。

K：七夕は？

A：七夕はやらない。話には聞くけど。ろうそくもらいもない。やっているひともいたけど今はない。お祭りもやらなくなった。コロナなのもあるけど。天狗さんの面をして村中をまわってあるく。古平もやってるかな（古平町の天狗祭のこと）

月見（十五夜）に関しては回答があったが七夕に関しての記述はなかった。古屋がSNSやネット上での七夕ろうそくもらいの調査をした際、余市での風習は確認できたが、積丹半島の他の町村での報告は確認できなかった。また社団法人旭川青年会議所による「旭川の夏祭り提言第1部」（1990）でも、旭川では「ろうそく出せ」と呼ばれるろうそくもらいの風習についての調査では積丹半島の管轄である後志支庁管内の町村では風習をおこなっていなかったところが多いという結果が出ている。その他の地域では十勝支庁管内の町村も少なく、本来よりなかったのか、早くに姿を消してしまったのか、追調査の必要を感じる。

うじらぼし以外の星の名について

K：うじらぼしはこんなかたまってる？（北尾氏が絵をいくつかかいてみせる）

A：北斗七星より小さい。

K：北斗七星はどう呼んでいた？

A：空を見上げて7つ…ひしゃくのかたちしている。みんな北斗七星と呼んでいた。
北極星も。（ほかの呼び方は？） 無かったと思う。

K：（うじらは）鶏のうずらとは関係ない？

A：関係ない。かたまってるけど。今でもでる。

K：いつ頃？

A：20時半ころ。イカ釣りが10・11・12月まである。その頃。（K：10月の何時頃？）

イカつけ出るのが20:30ころ、海へでるとじき出てくる。東から昇ってくる。するとイカがでる。（略）

K：夜明けの星や夕方の星は見た？

A：おおきな星見たような気がするけどもう覚えてない

今回、和名に関して採集できた話者が1名、高齢ということもあり多くの結果は得られなかったが、かつては前述のようにイカ漁を中心に、明け方の星や明けの明星、宵の明星に関する伝承も残されていた地域である。また北海道へ移住してきた人が元の地域の和名をそのまま使う事例（ノトボシ…ぎよしゃ座の α 星・カペラ。福井県三国町等では能登半島方面にこの星が昇ってくることから名づけられた）が同じ積丹半島の蘭越町にあり、地理的には無関係となったものの入植者がそのまま使用してきた珍しい事例がある。

おわりに：調査記録を元にした分析・考察

1. 北海道の和名（調査地の積丹半島を中心に）

今回、短時間ながら積丹半島をまわり現在の漁港の状態を目の当たりにすることで、漁の対象となる水産物の変化や世代交代により漁港の在り方自体が大きく変わってきていることを実感させられた。その状況下でも、高齢の話者のご存命でウジラボシの確認ができたことは奇跡に近いと言ってよいだろう。伝承を次代に伝えたくとも漁の方法だけでなく漁の対象自体が変化してしまうと過去の漁にまつわる伝承はさらに難しい。他地域でも同様のことが起こっていることは想像に難く今後の調査を行う上では調査地の優先順位を考慮する必要性を感じた。可能ならば北尾氏の意見を取り入れつつ、未採集の和名が残る可能性が高い地域の調査をおこなっていききたい。

2・道南地方の七夕ろうそくもらい

北海道には、「ろうそくもらい」と呼ばれる風習が存在する。隣近所の子どもたちが集ま

り、夕方から提灯や空缶でつくったカンテラを片手に歌を歌いながら家々をまわりろうそくをもらって歩く。地域や出身（入植前のもの）を越えて道内に分布する風習であり、現在も札幌や小樽、函館などの市街地では七夕行事のひとつとして続けられている。近年、TVなどのマスメディアや SNS で取り上げられることもあり、道外での知名度はあがってきているものの、小樽など大都市での状況をまとめているものはあるが（佐々木優香「北海道の七夕行事「ろうそくもらい」の囃子歌に見られる伝承過程について—小樽の事例をもとに—」小樽市総合博物館紀要第 35 号 2022. 3. 20）広い北海道全土を網羅しての調査は難しいのが現状である。はやし歌の歌詞に関しても地域差が見られ、伝播することによって歌詞に変化が見受けられ、地域の特色が織り込まれたものなどが指摘できるものの、その成立や伝承の過程についてはいまだ明らかにされていない。青森県のねぶた（眠り流し）との関連は以前より指摘されているほか、北尾浩一氏の先行調査によって新潟県佐渡島でのろうそくもらいの記録が採取されている。北前船による文化の伝播をさかのぼり、京都・祇園祭の山鉦町での囃子歌との類似を調査する試みを続けているが、covid-19 の流行により祭自体の自粛も続いたため進展が難しい状況である。

<採集したはやし歌の歌詞例>

松前：ことーしゃ 豊年たなばたまつりよ。おーいやいやよ。

ろうそく 1 本ちょうだいな。出さねば かっちゃぐど。おまけにどんずぐぞ。

函館：竹にたんざく七夕まつり、おおいに祝おう、ろうそく 1 本ちょうだいな

余市：ろうそく出せだせよ、出さないとかっちゃぐぞ

小樽：ことしゃ豊年 ろうそく出せ出せよ 出さねばかっちゃぐぞ おまけに喰つつくぞ

札幌：ろうそくいっぼん出ーせーよー、出さないとひっかくぞ、おまけにかみつくぞ

旭川市：ろうそく出せ出せよ 出さないとかっちゃぐぞ、おまけに噛みつくぞ

佐呂間町：ろうそく出ーせー出せやー 出さないとかっちゃぐぞ

おまけにくいつくぞ くいついたーらーはなさんぞ

風連町：ろうそく出ーせ出せーよ 出さぬとかっちゃぐぞ おまけに喰いつくぞ

上記は古屋がネット上で呼びかけての採取であり、サンプルが少ないながらも道南から道内地域に向かうにつれて歌詞が「ろうそくを出せ」というストレートな内容に変化していく。記録では『稲垣益穂日誌第 10 巻』（稲垣益穂・小樽市博物館編 1984）では異形の行灯をともし市中を練り歩き家々に入って「今年や豊年七夕祭り云々」と歌う様子が記述されており当初のろうそくもらいにはねぶたと大道芸の「門付」を合わせた性格があったことが推察される。江戸期から繁栄していた松前、函館、小樽には「豊年」「おーいやいやよ（大いに祝おう）」という一節がありながら、各地域へ伝播していくうえでの変化を今後追うことができらばと思う。また 2021 年 11 月の道南調査では、松前町の教育委員会にて「ろうそくもらい」の伝播に函館戦争戦没者の慰霊が関係あるのではという説の検証を試みたが、有力な資

料を見つけることはできなかった。しかし、当時明治政府より禁じられていた幕府側の戦死者の埋葬を松前等道南地域では地元の有力者が中心になって行っており、「ろうそくもらい」と戦没者の慰霊が何らかの形で結びついた可能性はゼロではなく、今後も道南地域（特に松前～函館）のろうそくもらいに関して調査を続ける必要があると感じた。また「白神タナバタ」「江良杵振舞」をはじめとする道南の七夕に関する郷土芸能も調査していくことで、まずは北海道特有の七夕に関する文化遺産の「玄関口」といえる道南地域のとりまとめをしていくことが望ましいと考える。

3・今後の研究への発展と課題

人が星の存在を認知するとき、長年の経験をもって規則性を見つけることで星を見ることを生活に取り入れ、やがてその星に独自の名前が付けられ後の世代へと伝えられていく。地理的な条件と歴史的な条件というふたつの条件を元に、日本の星の名前（和名）は上記のプロセスを経て、各地で生まれ伝承されてきた。野尻抱影氏の「日本の星」（研究社・1936）や内田武志氏の「日本星座方言資料」（日本常民文化研究所・1949）といった先行者の調査結果にあわせて、平成となってからも北尾浩一氏の「星と生きる - 天文民俗学の試み -」（ウインかもがわ・2001）「星の語り部 - 天文民俗学の課題 -」（ウインかもがわ・2002）「天文民俗学序説」（学術出版会・2006）をはじめとした調査結果が出ており、令和となった今も調査によって新たな和名の採集は続けられている。その土地の自然環境や生活の違い、宗教、文化など認知の形成に影響する因子は様々だが、なかでも北海道は国内の中でも特異な生活文化を残す地域である。多くの道民は道外のどこかの地域から新天地を求めて移植してきた人々であり、故郷で既に伝統文化の中で暮らしてきたその基盤を持って移住しており、地域ごとに入植前の土地の風習や記憶を受け継いでいる。上記にあわせて青森などの東北からもたらされたもの、北前船による日本海ルートの港地、その出発点ともいえる京都や関西からの文化遺産が複雑に絡み合っていることは想像に難くない。先達の調査研究によって多くの成果が挙げられているが、その後の北尾氏の調査によって新たな和名が見つかることから、まだ未発見の和名が残る可能性が残る地域と言えるだろう。

今回は実調査までには至っていないが、北海道の先住民族であるアイヌの伝承してきた星の名前や天体観に関しても、星や天体といった存在の認知という面から調査をしていく必要を強く主張したい。アイヌの星の伝承に関しては末岡外美夫氏の「アイヌタリのみた星座と伝承」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2009）「アイヌの見た星」（旭川叢書・2018）が唯一の資料であり、両著とも絶版のため一般が手に取ることも難しい。今年がアイヌ神謡集の著者である知里幸恵の没後 100 年にあたること、北海道を舞台に北海道アイヌや樺太アイヌの登場する漫画作品がヒットするなどして、アイヌ民族とその文化への一般の関心は現在非常に高い。未採集の伝承採集に関する可能性も、北尾氏がアイヌコタンのある二風谷にて末岡氏の調査資料にはなかった伝承の採集をしていることから低くはないと考える。末岡氏の遺族を通じて未発表資料があることも明らかになっているが、covid-19 の

流行により対面での調査や聞き取りは依然として難しい現状がある。アイヌの星に関する伝承を身近なものとし、現在この研究基盤を通じて繋がりのある北海道の各大学や博物館施設の協力を得て、末岡氏の調査が及ばなかった地域での調査を行う好機と言えよう。星を認知し文化が伝承されていく過程を調査研究していく上でも北海道は今後、精力的に調査研究を続けていくべき場所であると考えます。